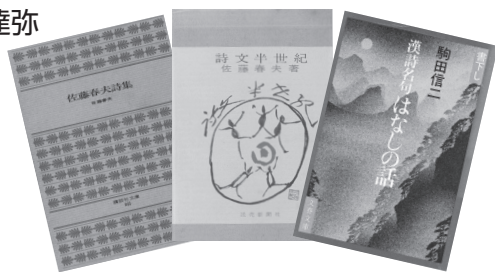


中国のほんの話(59)

## 文豪と漢詩（其の壱）

～ 佐藤春夫『車塵集』、『玉笛譜』～

蔭山 達弥



詩人であって、同時に小説家である一人に佐藤春夫がいる。佐藤春夫は明治25（1892）年4月9日、和歌山県新宮に生まれた。春夫は医師の長男として生まれたが、春夫も幼少の頃から祖父や父の文学的性向について、詩文をよくした。中学卒業後、上京して生田長江に師事した。その後、永井荷風の作風を慕って、慶応義塾大学文科に入学、そこで同級の詩人堀口大学と生涯の交友をむすんだ。

佐藤春夫の著作に、中国閩秀詩人の香り高い訳詩集『車塵集』（昭和4年）があることを知ったのは、駒田信二の『漢詩名句 はなしの話』（文春文庫261-2,1982）を読んでのことである。同書は漢詩の深い味わいを数々の名詩、名句を引用しながらわかりやすく解説した書下ろしのコンパクトな漢詩事典である。

東晋（317～420）のとき、呉（江蘇省）で流行した民間歌曲を「子夜歌」という。子夜という女性が歌ったのが原曲だともいわれる。40首あまりが伝えられているが、いずれも女の、男に対する恋情を、女性の側から歌ったものである。

「誰能思不歌 誰能飢不食 日冥当戸倚 惆悵底不憶 佐藤春夫の訳詩は「思ひあふれて歌はざらめや 飢をおぼえて食はざらめや たそがれひとり戸に倚り立ちて 切なく君をしたはざらめや」春夫がつけた表題は『思ひあふれて』、もう一首、『女ごころ』という訳詩、「宿昔不梳頭 糸髪被両肩 腕伸郎膝上 何処不可憐」春夫の訳詩は「むかし思へばおどろ髪 油もつけず梳きもせず 一たび君に凭り伏して わが身いとしやここかしこ」いずれも『車塵集』に収められている。

佐藤春夫は自己の生涯の記録と感想を作為なく漫然とまた雑然と書き流した『詩文半世紀』（読売新聞社,1963）「第13章・詩人という者」のなかで次のように述べている。

「『殉情詩集』（大正10年）の発売されたころのわが詩壇は、民衆派の自由詩が独占しているような有様で、わたくしのもののような古典的な風体のものは、世の好尚に合わないところがかえって珍しかったものようであった。わたくしはこんな古風な詩の創作のほかに、同じく時代と逆行するかのように、詩の学びと、東洋には詩というものが無いかに思っている

らしい時代的迷妄の啓発とのために、独学固陋の身を憚れず、『車塵集』や『玉笛譜』（昭和23年）と名づけた中国の詩の翻訳を試みた。古典派の詩人として、古来わが国の詩歌の伝統に影響するところの多かった中国の詩情をたずねて置きたかったからである。当時、中国文学研究の学徒諸君が、失礼ながらあまりに迂闊にも見えたからであった。わたくし如きをしてそんな重要な仕事をさせて置いたのは、中国文学研究諸家にとって決して名誉にはなるまい。今日では大いにその気運も興った。わたくしは代用品の役目を果たし得たので、この方面のことはもうこれ以上する気もないし、する必要もあるまい。わたくしは捨てられていたゆたかな荒地に、ちょっと鋤を入れてみただけだったのだから。」

春夫は大正10年、29歳の夏、友人に誘われ一夏台湾に遊んだ。昭和2年7月、夫人同伴で中国旅行、昭和7年1月には魯迅の『故郷』を翻訳し、『中央公論』に発表、昭和13年9月にも、文学者の従軍海軍班の一員として1ヶ月程中国に赴いている。昭和16年には『支那雑記』も刊行した。

春夫は昭和39年5月6日、自宅で急逝したが、杜甫の有名な詩『春望』を下敷きにした『現代日本を歌ふ』は、おそらく彼の最後の詩作品であろう。冒頭の部分を掲げる。

「国破れて山河あり 秀麗なりしを 背は腹に代へがたく産業大に興り 空にスモッグという毒霞立てこめ 清流は毒液をまじへて死魚を浮べ 大臣はトランジスターのセールスマンを兼ね 官庁とホテルと都には高樓多きも 土一升金一升量一畳庶民は枕するに処なし 我ら不毛の野に住まねど食ふに糧なく 砂漠に生きねど飲むに水なきを如何せん」

春夫の詩はある種の「むごさ」といった苦痛の情感を伴っているが、これが感知されなければ、春夫の抒情詩を理解したといえないだろう。

かげやま たつや（教授・中国文学）